

A vertical ruler scale from 0 to 6 inches, with major markings every 1/8 inch. The number 20 is highlighted in red at the 10-inch mark.

明和流鏑馬記

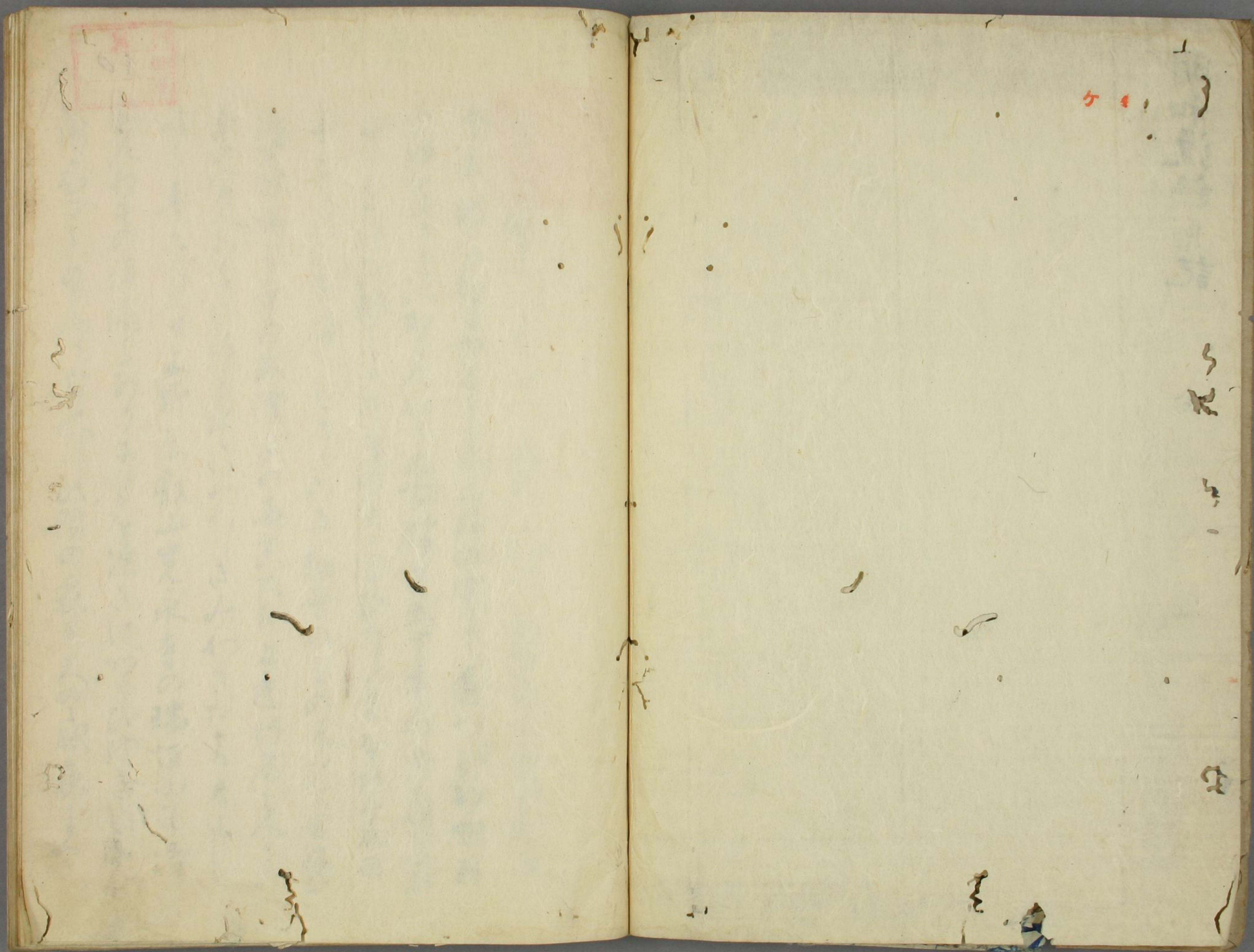
卷一

三

明和流鏑馬記

卷一

三



良
門號卷
80



繪

今年ゆうらかよやまく二度のせよ遠つもあわ
て西をすくにむかんがこの古所は五十年の街あるわ
くとひ柳とうか月のかはむくよあたぎれの
ゆうてはかきゆくじりのき勅令のよりりを絵
道筋湯玉寺の文證誠のあえたは上達教及夫の
かの宮人あまくほひてどうきみわざひりくし
四年九月一日上野至駿山寛永寺の瑞臣少て御
かんわさの流病るわうと家を涼しけづひ泣きいえ
涙よもさうのまうせよは頃の森も天の感應す

す。ハ、神事もすむ時ゆゑと、いともうとか
事事事あり。余はやう人の仕人は晚のかくて、内侍
ゆきやういふて、かく角くあはれぬわきを
ゆきやういふて、かく角くあはれぬわきを
ほり。さねばは、せよして
豈言多く
元朝に
榮光
ほりの日の正ゆき。まは神事の事もあつて、跡を下
せり。右は皆のひうち、下がへり。清陽をかみよせらうや
て、萬のたうはあつた。的を下せり。きるかう。おまざまの
ひめは、やく極多を生て、帰主寺のものねぎ。神事もり。ひめ
は、朱色一色の核舟を執政。清季。從官下に御詔勅。

或人評
下于孔云

予舊未小幅也。流傳于今者。

三

うらさくおまねまいちかがむにかゆうて家の紋を
水干をそぞりのうは紅朽木本城うちつる久良右衛
兵をれ立不感の人は朽木本城とえもすうち龜井は
精ひゆきめいりよきこのゆぬもほくせんじの兵を
ふくらむそぞりあくあ笠いとえなよそぞり夏毛す
やたむすしのひづきとほきに泥紫の弓かいぐくむ
あく短刀あく
火御取のえよとれい
若木ひきくもとひきを負ふり弓取へさくら
火御取へまくはあわくはばひ縫引のぬらは素
まく真ち小矢いがきくまくまく志那宿の門まき

七

少翁は少ちのり庵坐すまうり山中風ひのうす。まう
祕院にし石のすくは行房の鞭ねまつるおぬれは
貝織いえり地わくをの邊織りとえく面舟徇等
瓦石はくそん萬よかいうくさん檣收萬ハえ丈
の佐例をあい竹とよみの障泥うさぎをすけりし
よのうくちきあうのあわるまくらあります

絃

ゆふよ初日ト石ク十をえひナクをゑひきる地逐
の途もまうるへ後是射村のるうてあら、別よひくは
穿けり實れひよつてすわへいといよのせす

下ケ賛云求義却入定陽元。

ひゑい坐すとほめやもまよ人今まひぬくをあらう
歌ひ歌ひやうりりんと多き内室にひむると、とかし
村の宿よ少版の良跡、ひきとひくをゆれのゆはせ
うれ、余多め利うとせゆ善のひきひく捨難の和
ちをかのたの前アモシラ翁詩はかのたのゆよ
あゆゆううのゆきら翁詩はくゆゆるよすれをあら
よみよすち翁詩は十九布へ的ねえ、ゆよあひぬか
まち翁詩は小素襪ゆき翁詩は麻のうあ翁詩をあ

絃

文殊獨り妙ひなりきらひ男御門を入り、翁詩をあ

杜工部集卷之三
全蜀王氏注音下
徐陵流清賦

卷

自大云
准正猶固氏

さとひごや四元徹よひゆの達とせあふれま此望そ
す事やくべつめくわば疏もりあつて一乃射すらあいよ
乃をまくおおは辱の方もじきをくテキ
ぬたうち十竹う一ほまとの射人はまの方ひしりてまをひ
くまうさとうちまもとの射はゆめ方にじきえとく
射する事もらぬ今浮も海すにとまえと
まをむく水がひねけひとまくもとまくもとまくもとまくも

右多子

一萬の切札的立一乃的をもむニ三の的と云ふれば一の
体が扇形少々入今も ゆ祐事跡をぬくやとれ後人
當てよあはてくうじい後下れは貞信高文酒也トモトカくあは式な草は
在り原山也お記ほすりなまづりをゆもけ不彌

経

五都といはれどもがちわきの玉と松勤の村すりうすは
いはかふくはれんとるをとくとくはゆるもひ
うらめにれんとてほひなれんハ未度をゆききて
笠の端えなつろいあまくはりのまくはと松勤
乃扇といはり

夫若とくと多クとくとこうようちの子一の的射刻く
鏑弓よき所あはれ二乃的と、鏑弓としあくすらの的を
ゆて射あそくゆくとみわらきゆくわらたら。のちの三
つりわらよるをすくぢしゆよあゆせく流漏ち舍乃
前すとく

経

ばれり宗の的射的射ゆきよれ多く的とくとくと
もねく保格難の有きよと男達の外を歩く的射路すと
くては傷まよれぬとしやく心事の御すりふの的を
おそれ等の傷抑つういふをよき序於てこの的射刻く

絵

うれやうふをく小さきよゆくまくかうまつひくせと
わく石を敵ぞまうりてよ難や村儀そのくの的
もいとと射矢たれの因位すみの言をあかひ及
酒行の慶應へてとがちひゆくおの爲めあひむ
下れ石頭送也

もまれをくらひてりかくまともじてほりねり化物か

おきしんよいうゆる祕曲をうやれ

絵

漱口害氣を消除、魑魅妖變をもよそよひへます
又所をく離んに往すてな先へ稀うる山中才

きるよ車一も女郎のひよき娘のうん人すむ
又云化湯中養ヒ取リて毎晚うしの牛乳須要考ル
さらあうりぬくわむ乃へときうよゆ山も崩から
やになんあう

絵

地獄の國すむはうねむしむよ下る。にてすま金まえ
けよひぬ日記下よ出居せくくも各もがきのる
村は流病の舍をいと、其の山あは列立ひよはし
下れ舍てて元列復装本而する考用一版ナシカフアキ
めのや古都のまよは浦まひまうこそ豪華モア吊る
し、廟モチ禱モテア田舎を多くをけり今日の式すあわづ
しゆ有は田舎浦をとてりて賽一の神をを御

祐國とまほりぬ

経

ともとひ流瀬了はす。毎氣有者百處の武神後
そやもいへくをまの近來多處の説討せし。終る
れを極て物りて神社の御神名を祀る所を以て世
よをそそげりぬる名を以て。主事殿と云
ふ。秀郷明臣の叔達を訪ねて慶院へ文修す。

下れ三下三本不須說

又くに見

経

後堂を經乃し。將軍室町家致きむ。之にて

は計無の事をほどのも廢ります。とあつて附
武田何某流瀬るの式ひ終して二か月を経り。其
より水を引いて人よりハアツキあらう。とこゝにせ
とあらひのえにて、永源の娘のめなりこのま
ま。す。すうちあらもひのうきをつ。御ふを保
のう。あるかく君を思ひたまえ。筆をえ文ふのじ
す。ものこれぬ

経

君をモ因は射矣。すもゆれ。うまれ。は。捨難の扇
は。の射。の。い。い。金を。れ。ぬ。ま。う。は。い。せ。ゆ

あはるもむすづきくわとこみりくら
のいのうけにけれ絶てをほきもくわくをねこし
うしき小狼者ふりまわせつれそれゑくら
かほのいゆえもくはやへとまきあくわく

絵

山道を取るよ彼のやう年とや十数う年とのむ小笠原義
法の長ながるそよぬうち民長建武自和のの印いん物もの小
下れ玉毛深丈正吉作傳つたちと郊のを跡あとやうやうるの原はら花はなそくう等だ
故院ごいん役わく志し田た家いえ山さん高たか木き山さん神じんを経へどりよひ山さん
係きを身みゆゆこそ奥おくまきゆゆすうらうる石いし室むろ内うち

山道とむらの跡あとを巡めぐらす海うみをちね共とも山道さんどうを達たどり奥おく

絵

山道とむらの跡あとを巡めぐらす海うみをちね共とも山道さんどうを達たどり奥おく
役わくをきわじ

絵

山道とむらの跡あとを巡めぐらす海うみをちね共とも山道さんどうを達たどり奥おく
役わくをきわじ

下れ玉毛深丈正吉作

被は育いく自有あり北きた記きへそそ旦たん也や平ひら文ぶんに中なかすああくくて

新しん作さく

在ひれやとちのけりまがしきようと
らはるのりさきゆやのまゆくすてにあく角鶯
らはく角すあくをばんらもひりおふあくわを
まされとこの道とまむか

絵

うそあくひのまゆくす画ようくしめの式のま
くくまくはまぬ的あいすと半の法量般後等
こそそうてハシをりよひくまえ般をとあつ
くまよひりーりゆりぬ

絵

ねまえうううた西あみだくううてりすよ
被衣の即すよ席を遙かんまくせの花束のえ膚を若
まのわくの郊外の風をくすくすひうち今に
古そ歴年日かくじ日入そつぶ林萬うら里をなす
うれ進うちうらを何うの先人のつられうら
ううよゆきう中系

有祇廟宇一ノ室一文質さかんふなりーうう造
くのあひ師も尊徳すかうーーううきく
下れ云一首の詩を古文書に抄へて序文を附す文錯且せ公子勅をもれ二首の好達性才元
一通筆手の詩をもれ二首の好達性才元
ねまえうううた西あみだくううてりすよ

絵

一
傳
之
於
此
也
如
其
所
謂
之
家
業

明和二年丁酉十二月

小笠原

後助持易謹識

自丈云

右文修名取自作二十八字

浪客 四山傳奇

文章を担当せよ。江を
之へ渡せり。水難を免むるに一役せられ。後より秋
け化をへりし。す返事もござりまじ。

貞丈在矣。又如許天如左

二法の事。上右年号を訓よまんべし。
考
米芾とソクナガ書云々と云佛寺日記より五
處もと乃づくらよ天爵とあふの事ともあらず例年
きてひじりの春秋又須彌の日記ト昌黎也行
うるやうのちのよひアの年
執政參政。御老伴名年と云名ハ
よもり余せばむか御社名
ありとれを猶御すと思ふやえどもぬ名を仰りカ
や名をえひざるは惜御する執政參政と云名をあつむる
も今世。名すれどもかくあまくあれ用すきゆのうり
唐人記と云ふそぞれは唐人也をやえ年号といひゆのうり
と云ふ也。考中古公の事。五年亦と云脚の事とト譯
せば唐人念多矣。トヨリあきらめあらじ

きりとけりもキの文唐人よアモリタマの事
中後官小納郎徒兵帥歎軍書院軍新軍大軍群屬節
トモトサ名を乍りてつひ立るるアラシ 沙徒頭ハ守卒
乃隊長帥ハ大將軍之隊長と云將軍とハナ位ス、蓋すア又
位但と云但ハ隊也隊を云々と舊あらクを軍と云之得ム、
軍と書を云々云得也語云々少セド、云名を捨て舊名を
新名作りて書ム、云者れあラキム公家ノ官佐ニ唐名セ
一執政等の名ア弗ちれの字を加エテ位署書の法を取ラキ
文例文あくと宦佐をハ御オわけられとも稱号を事す松平
少翁時松金ホセを捨テ久後世ヨ彌テ松平ホシハ

ひれあがりハトモト
一派の深澤秀宗に於て多事の御用事
書例文や手稿を専門軍の所蔵する例文す
る上而文より伊能忠敬公の筆跡を間保
記しておき、とて多く書類の如くや手稿
中やも書はの事多くわざと書きもて
一時は是立之。左近の如くの如く
紫赤と云ふ事之やとある。討は
一日槍を又行役名をいふす私に御名を作り公を上也
一連射山二字の名前六才八モノアリオムモノハ追物ナリ

牛追物大追物ノれ生物を追て射ラ云流儀の約ハ生
テにげ毛をぬるわく云れ、弛射の字を用ひて流射と
云ふきあう

一は追被象と傳へ。ひゆ今文云々人のあらうと云ふ
御令云々と云ふ

一有社廟。廟の字公と同ひ族名を称。少院号ハ勅号か
きく和制り云々。古の少院院後多羽院から少
名を冷泉廟後多羽廟かと考る例す

一は文の一族流傳の傳へ。ひの記事と思ふ。七章の贊言
は華麗詞多し。所以名號とハ古今少々右傳名を傳す

て少人六通。さうんと自の身ハ三事にて法を加てうや
乃事後進を傳す事甚也。又自家を誇る所す。又人よ聞
く事多キ。ナレトナリあり。又事多キ。故れの氣体
あり。又事多キ。の邊す。あり。一節文章の凡てもさ
うきりと申す。かくきのとく。うらめ也。

安永二年甲午六月廿九

佐藤平彦貞丈評

近見

文の中よしるうれとうあやかせ又さざな後鞆又
その里あてうちうちゆきうす又そのゆゑすよ
あらわゆるを又名をもすりき不繼又跡のる
卯月又もうげす荒山うねの村宿乃華飾也
公は敵せんと教むるは年め記録す也乃浮華乃
幻を身たり謹慎而きよくよせや文を能むよキ也
男ハ男の文叔あり女ハ女の文叔ありもろこくりや
女のみ冠のこころするゆかりはすまじのゆ女之
切くすよそく

安永四年七月十九日 伊勢直丈 信用

於別荘

傳方金郎良真

